

# バリアフリーの先へ



④

# 障害者を「働く納税者」に 娘がくれた生き方で前へ



「健常者と同等に障害者が就労する」という理念で活動するプロップ・ステーションの竹中理事長

米国由来の「チャレンジ」という言葉がある。「神から挑戦する機会を与えた人々」という意味で、「心身が不自由でも働き、納税者になれるよう」との理念につながる。社会福祉法人プロップ・ステーション(神戸市)理事長、竹中ナミ(71)は重度の障害がある娘のために、チャレンジの就労支援に取り組んでいる。

竹中の娘の麻紀(47)は脳に重い障害があり、言葉が話せず、ほとんど視力もない。生まれてすぐ保育器に入れられ、ミ

ニジの就労支援に取り組んでいる。

ルクはスポットで飲ませた。「10年は生きられないと死ぬ」と医師。実家の父は孫の将来を悲観していた。「この子を連れて俺と一緒に死ぬ」。竹中は違っていた。「どうして皆、ネガティブなことばかりで健常者と同等に働ける

職場が必要と考えた。通常の福祉工場のよう

勤務」制度を創出した。

「ジが180度変わる。

竹中は中学生のころ、近辺では名うての「フル」だった。中学2年で何回も家の家出をし、神戸・三宮で遊んでいたとき、「子供がこんな夜遅くいる場所じゃない」と声をかけてきたのが、三宮で一番の売れっ子ホステス「椿姉さん」だった。当時、竹中の周りにいた大人たちは、水商売で大企業に就けない人たち」と半ば軽んじていた。しかし椿姉さんの部屋に居候

働き方改革の流れはチヤレンジのよくな住宅ワーカーに「大きな追い風」。だが竹中は「まだアカン。もっとチャレンジが活躍できる社会にせな」と前を見据える。

「毎朝掃除して床はいつもピカピカ。朝食時に英字新聞で情報収集。神戸の街を仕切る」怖いが無事に生きていける社会」を目指し、1991年にプロップを設立。チャレンジが納税者として健常者と同等に働けることをインターネットで全国に割り振る「在宅勤務」制度を創出した。一目置いていた。大人たちの言っていることが実は正しくないことを椿姉さんが証明していた。

「自分はレールを外れた生き方しかできなかつた。社会のレールに乗れなかった。社会のレールに乗れない子を授かった親として、他人と違う生き方を」。竹中は腹をくくる。

詳細な記事を電子版に  
▼ストーリー→「バリア  
フリーの先へ」  
|| 敬称略